The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〔資料紹介〕陽明文庫蔵「近衛基凞消息」
Author(s)	川崎, 佐知子
Citation	詞林. 2009, 45, p. 76-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67597
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

資料紹介・陽明文庫蔵「近衛基凞消息」

川崎　佐知子

ここに紹介する「近衛基凞消息」は、財団法人陽明文庫に蔵される近衛基凞の自筆消息約七百通のうち十五通である。さきに、拙稿「陽明文庫蔵「近衛基凞消息」の翻刻と解題」（『京都大学國文学論叢』第十九号　二〇〇八年三月）において、文学関係の書物名を明記する基凞の消息三十一通を翻刻紹介した。これとはべつに、本稿では、陽明文庫蔵近衛基凞筆『源氏物語』全五十四冊（以下、「基凞自筆本」と称する）の書写作業に関連する消息を選んだ。

基凞自筆本は、元禄十三年（一七〇〇）九月二十三日から宝永元年（一七〇四）五月二十五日までをかけて書写されたのち、宝永元年五月二十五日から宝永二年九月十六日までには、校合がなされた。同本の親本は、平松時量が、後西院御本を転写した本（以下、「平松時量本」と称する）である。基凞は、敬愛する後西院ゆかりの平松時量本を青表紙証本の三転本と重んじ、努めてこれを忠実に写した。同時に、各巻の書写・校合のために費やした日数や紙数を、基凞自筆本の付属文書「源氏物語書写校合日数目録」一冊（以下、「付属文書」と称する）に、詳細に記録した。

元禄十六年春の関白辞任を機に、基凞は書写作業に専念するようになった。平松時量本は、おそらく全冊が近衛家本殿に預け置かれ、そのなかから、基凞は必要な一、二冊を、当時居住していた堀河殿に取り寄せたのであった。写し終えた巻と新写した本とは本殿に返し、かわりに次の分を求めた。基凞の求めに応じて本を出納したのは、基凞孫の近衛家久であった。本稿で翻刻した十五通は、その本の出し入れに際して、基凞から家久に送られた消息である。

十五通の消息には日付が記されるばかりだが、基凞自筆本の付属文書との照合により、幸いにも書かれた年時を確定できる。こうして判明した年時の順に翻刻を掲載した。それぞれの消息に関して、以下、簡単に説明を加える。差し出し所の「悠」・「悠見」・「悠叟」・「悠見叟」・「悠見子」・「堀河叟」は基凞であり、宛所の「亜相殿」・「大納言殿」は家久である。

〈35864〉（通し番号①）は、「廿二日」の日付があるのみだが、付属文書と対照して、基凞が、元禄十六年三月二十二日に花

宴巻を書写し終えた際の消息とわかる。これに添えて、基熙は花宴巻の平松時量本と新写本とを家久に送り、あらたに平松時量本のべつの巻を求めた。本文には「源氏物語一冊」とだけあり、とくに巻名は指定されなかったようである。付属文書によれば、基熙は翌三月二十三日より葵巻の書写を開始しているので、この消息を受け、家久は物語の巻順によって次の巻を選んだのであろう。

八月五日付の〈35733〉（通し番号②）は、元禄十六年八月五日の絵合巻書写終了のときの消息である。この場合も、「次巻」とあるだけで、巻名は明記されていない。付属文書から、翌六日より松風巻の書写が始められたとわかる。返し書きの「中東」は、奈良春日社社家の中東時真である。

〈35735〉（通し番号③）は、元禄十六年八月十四日に松風巻の書写が完了したときの消息である。次巻は薄雲巻で、八月十六日から写し始められた。

〈35671〉（通し番号④）は、元禄十六年八月二十三日付で、薄雲巻書写終了時の消息である。次巻は槿巻（八月二十七日より書写開始）である。「右府」は近衛家熙、「中東」は中東時真、「成身院」は興福寺成身院英算、「治部少輔」は近衛家家司の今大路孝在である。

〈35728〉（通し番号⑤）は、元禄十六年九月五日付、槿巻書写完了時である。次巻は乙女巻（九月五日より書写開始）である。

〈19473〉（通し番号⑥）は、元禄十六年十一月二十一日付で胡蝶巻の書写終了の際の消息である。次巻は蛍巻（十一月二十二日より書写開始）である。

〈35734〉（通し番号⑦）は、元禄十六年十二月十三日の蛍巻書写終了時である。「次之巻二帖」とあるように、基熙は、同時に二冊を要求することもあった。付属文書によれば、巻順どおり、常夏巻（十二月十四日より書写開始）と篝火巻（元禄十七年正月五日より書写開始）が遣わされたとわかる。

〈35853〉（通し番号⑧）は、元禄十七年正月二十三日付である。本文には、前日に「江次第」「源氏物語等」を受け取ったことが書かれている。付属文書によると、基熙は、同日より幻巻を写し始めた。「左府」は、同年正月十一日に右大臣より転じた家熙である。

〈19459〉（通し番号⑨）には、匂宮巻と御法巻の巻名が明記されている。付属文書によれば、匂宮巻は、元禄十七年正月二十八日に書写開始、二月一日には終わっている。したがって、この消息は、匂宮巻を書写中の元禄十七年正月三十日付と考えられる。次巻は、基熙自身が御法巻（二月一日より書写開始）を指定している。

〈19476〉（通し番号⑩）にも、〈19459〉と同様に、匂宮巻と御法巻の巻名が見え、元禄十七年二月四日付と判断できる。御法巻は、二月五日に写し終えられており、文中の「今明日中可遂功候」という記述に矛盾しない。このあたりの書写は必ずしも巻順どおりになされてはいない。消息では、基熙は自らは

指定せず、次巻の選定を家久の裁量に委ねる旨伝えている。家久が選んだのは紅梅巻であった（同年二月六日より書写開始）。

〈19463〉（通し番号⑪）は、紅梅巻の書写終了時の消息である。付属文書では、紅梅巻の書写終了は二月九日で、聊か不審はあるが、次の竹河巻（二月九日より書写開始）は、基熙自筆本の書写順と一致する。元禄十七年二月八日付の消息とみて間違いないであろう。

〈35851〉（通し番号⑫）は、宝永元年（元禄十七年三月改元）四月十日付で、蜻蛉巻を終えたときの消息である。次巻として、基熙は藤裏葉巻（四月十三日より書写開始）を要求した。

〈35860〉（通し番号⑬）は宝永元年五月二日付である。蘭巻を終え、横笛巻（四月二十八日より書写開始）を求めた消息である。

〈35856〉（通し番号⑭）は宝永元年五月十一日付で、鈴虫巻を終え、次の二帖を要求した内容である。長期間に及んだ書写作業もほとんど終わりに近づいていて、この時点では、梅枝巻（五月十一日より書写開始）と夢浮橋巻（五月十八日より書写開始）を残すだけであった。本文中の「先日書與候伊勢物語」とは、元禄十六年正月十四日に基熙が書写した『伊勢物語』を指す。

〈35727〉（通し番号⑮）は十月十五日付である。本文中に巻名が記されないうえ、付属文書の書写終了の日時と一致しないため、〈35727〉の年時は不明である。乙女巻は元禄十六年十月十三日に完了しており、あるいは、そのときの消息かと思われるが、確定できない。

なお、拙稿「近衛基熙の『源氏物語』書写―陽明文庫蔵基熙自筆本をめぐって―」（大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』和泉書院　二〇〇九年五月刊行予定）に、基熙自筆本の書写がなされた事情、および、同本と「近衛基熙消息」との関係について詳述し、本稿に掲載した十五通とはべつに、消息八通を引用した。あわせて参照いただきたい。

公表にあたり、財団法人陽明文庫・文庫長名和修先生に、懇切に御指導いただきました。心より御礼申し上げます。

〔凡例〕

財団法人陽明文庫蔵「近衛基熙消息」のうち十五通を翻刻する。翻刻に際しては、原本を尊重することを第一に心がけたが、便宜上、以下の方針で手を加えたところがある。

一、掲載順は、陽明文庫蔵近衛基熙筆『源氏物語』の付属文書「源氏物語書写校合日数目録」との照合によって判明した年月日の順にしたがった。年時を確定できなかった〈35727〉（通し番号⑮）は最後に置いた。各消息には、本稿における通し番号を、算用数字で付した。所蔵番号は、〈　〉内に示した。また、原本の形状と法量を（　）内に記載した。

一、改行は、原則として原本のとおりとした。返し書きは本行本文より二字下げとした。返し書きが、行間に及んでいる場合は、本行本文より前に出し、まとめて示した。端裏書は、本文末尾に「（端裏）」として、「　」内に示した。

一、原則として、漢字は通行の字体に改めた。

一、折紙状は、折表の末尾を「」で示した。

一、本文には、適宜、句点を加えた。

〔翻刻〕

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

（かわさき・さちこ　立命館大学非常勤講師）